

第6回講義 (20130531)

<先週の発言の訂正>:

- ・結婚を認める牧師のことばは、約束でなく、宣言である。
- ・「正々堂々戦うことを誓います」という選手宣誓は、宣言ではなく、行為拘束型発話である。
- ・プリントの p.19 の番号を飛ばしてしまいました。p.18 のつぎが p.20 になっています。

§4 問答の観点からの推論

<参考文献>

- ・Anscombe, Intention, 1957 2nd version 1967. アンスコム著『インテンション』(第二版の訳) 菅豊彦訳、産業図書、1984年。
- ・Anscombe, 'Practical Inference', in R. Hursthouse, G. Lawrence and W. Quinn (eds.), Virtues and Reasons, I-34, Clarendon Press, 1989.
- ・von Wright, 'On So-Called Practical Inference', Acta Sociologica 15, pp. 39-53.
- ・菅豊彦著『実践的知識の構造』勁草書房、1986年
- ・2006年度前期「実践的知識・共有知・相互知識」
- ・早川正祐「アンスコムの実践的推論:推論図式に関する考察」(上智大学『哲学論集』34、2005)

先週述べたように次の二つのテーゼ

コリングウッド・テーゼ(CT)「質問以外のすべての発話の意味は、問に対する答えとしてのみ確定する」

テーゼ①「質問以外のすべての発話内行為は、質問に対する返答としてのみ成立する」

が成り立つとすると、発話や発話内行為を、問答関係において理解することが必要になる。ところで、CTを証明する方法の一つとして、次のような論証が考えられる。

- (a)質問以外のすべての発話の意味は、それを結論とする推論を理解することによってのみ可能である。
 - (b)推論は、問に答えるプロセスとしてのみ成立する。
- (CT)ゆえに、質問以外のすべての発話の意味は、問に対する答えとしてのみ確定する。

この論証を完成するために、この §4では、(b)の説明と証明を試みる。

1、推論は、問いを前提する:理論的推論の場合

(1)理論的推論の定義

理論的推論というのは、<すべての命題(前提と結論)が真理値をもつ文であり、かつ、もしすべての前提が真理であるならば、結論は必ず真となるという関係にある諸命題の関係>のことである。(暫定的な提案です)

(2)理論的推論は問いを前提する

一つ的前提であっても、二つ以上の文を前提とする推論であっても、それは多くの文を結論としてもつことが可能である。例えば、次のように多数の結論が論理的に導出可能である。

S is M
M is P
‘S is not non-M’, ‘Some M is S’, ‘Some non-S is non-M’, ‘M is non-P’, ‘Some P is M’, ‘Some non-M is non-P’, ‘S is P’, ‘S is not non-P’, ‘Some P is S’, ‘Some non-S is non-P’, etc.

[ミニレポート課題:この例を挙げてください]

したがって、その中から一つの文を結論として選び出されなければ、推論は成立しない。その選び出しは、論理的な推論関係だけによって行われるのではない。それを可能にするものは、問いである。問いに対する答えを見出そうとする試みとして推論を説明することによって(のみ?)、一つないし複数の前提から一つの文を結論として導出することが説明可能になる。

例えば次のようになる。

What is S?

S is (not others but) M. (minor premise)

M is (not others but) P. (major premise)

Therefore S is (not others but) P. (conclusion)

2, 推論は、問いを前提する:実践的推論

(1) 実践的推論の定義

<アリストテレスの例>

乾いた食べ物は、人間の健康にとってよい。

しかじかの食べ物は乾いている。

私は人間である。

これはしかじかの食べ物である。

ゆえに、この食べ物は、私の健康にとってよい。(『インテンション』訳 p. 111)

アリストテレスが挙げている実践的三段論法の第一前提には次のようなものがある。

(a) 乾いた食べ物はだれにも適している。

(b) (私は) 甘い物なら何でも味わうべきである

(c) 甘い物はどれも快い

(d) そういったタイプの人はそのようなことをすべきである。

(最初の三つは、『ニコマコス』(1147a6-7, 1147a28-30)から、最後の物は『デアニマ』(701a12-14)から)

これらは、次のようなものである。

「…べきである」(行為を指令する表現)

「適している」(客観的評価語)

「快い」(主観的評価語)

(一般には、実践的推論の前提として、

「…するつもりだ」(意図・意志の表現)

「…したい」(欲求の表現)

などもよく使用されるが、アリストテレスには、そのような用法がない。そして、後述するように、アンスコムもまたそのような用法をみとめない。)

アリストテレスによると、実践的推論の「結論は行為に行き着く」あるいは「結論は行為である」(De Motu Animalium 701a12-14)

(2) アンスコムとウリクトの論争

(上記、早川論文を参照)

■アンスコムは、実践的推論の結論は、前提から必然的に帰結するのではない、と考える。それどころか、前提から結論が必然的に帰結することを拒否している。

これに対して、ウリクトは、理論的推論と同じく、実践的推論でも前提から結論が必然的に帰結する、と考える。そこでウリクトは、つぎのような推論を考える。

I want to attain the end E (e.g. make this hut habitable)

Unless I do action A (e.g. heat the hut) I shall not attain E.

Therefore I do action A.

この結論は、必然的に出てくる。なぜなら、Eを獲得しようと欲しているならば、そのために必要なAをしないことは矛盾するからである。(意図ではなく、欲求が前提であっても、結論は必然的に出てくる。しかし、その場合には、その結論から行為は必然的には出てこない。)

二つの種類の実践的推論の図式の例を以下に示そう(おそらく、これ以外にも考えられるだろう)

<結論を必然化する場合>

行為Yは目的Xの必要条件である、あるいは行為Yは目的Xの部分を構成する

私はXすることを意図する

私がYしなければ、私はXしない。

ゆえに、私はYすることを意図する

<結論を必然化しない場合>

行為Yは目的Xの十分条件である。

私はXすることを意図する

私がYするならば、私はXする。

ゆえに、私はYすることを意図する。

ところで、アンスコムは、このような心的状態への言及を実践的推論の中に持ち込むことを拒否する。その理由は、(早川論文によれば)両者の実践的推論の理解の違いによる。

(ちなみに、私は(アンスコムとは異なり)、心的状態への言及を実践的推論の中に持ち込むことと、実践的推論を必然的なものとする事柄は、独立した事柄であろう、と考える。)

■実践的推論についての二つの理解

アンスコムは、実践的推論を「私は何をなすべきか(どうすべきか)・qすべきか」という「熟慮的観点」からの推論であると考える。

それゆえに、熟慮的観点から問題になるのは、「qしないのならpをもたらすことができないと思っている」ことではなく「qしないのならpをもたらすことができない」ことである。つまり、「…と意図している」や「…と信じている」などの心的状態への言及は推論の要素にはならない、と考える。「私は、何をなすべきか」という観点から行為を問題にする際、行為者が注目するのは、ある条件・状況についてあることを思っているという「心のあり方」ではなく、目的達成に関連する「世界の条件・状況そのもの」である。」(早川)

それに対して、ウリクトは、実践的推論を、「早川は何をしているのか」「なぜ早川はqしたのか」という「解釈的観点」からの推論である、と考える。

この区別が、アンスコムとウリクトの解釈として正しいのかどうかは、今の私には判断できないが、しかし、この区別は、実践的推論を考えるときの重要な区別である。

では、どちらの理解が正しいのだろうか。それを考えるためには、アンスコムの言う実践的知識と実践的推論の関係を明らかにする必要がある。

(3) 実践的知識と実践的推論の関係

■実践的知識の説明

アンスコムによると、意図的な行為は、「なにをしているのですか」と問われたとき、観察によらずに、即座に「カレーを作っています」のように答えることができる行為である。しかも、更に「なぜカレーを作っているのですか」と問われたときに、観察によらずに即座に「2日持つからです」のように理由を答えることができる行為である。アンスコムは、この場合の「カレーを作っています」のような知識を**実践的知識**と名づけた。観察しないでも、答えることができるのは、私が行為している時には、自分がなにをしているのかの理解が常に伴っているからである。

もう一つ例をあげておこう。

「なにをしているの」

「Xさんの名前を書いているのです」

「なぜXさんの名前をかいているのですか」

「Xさんに投票するためです」

「45 **実践的知識**とは、あるプロジェクトを**観察しないで**指揮している人物が持っている、為されていることについての知識である、と考えることができる。ただ、問題は、かれの命令が実行されていないとすれば、どうしてこれが知識であるのか、ということにある。」(『インテンション』訳 156)

「実践的知識」という語は、**know how** の意味で用いられることもあるが、また**暗黙知**の意味で用いられることもある。アンスコムのいう「実践的知識」はこれらとは異なるが、「**観察しないでしている**」という点で共通している。(他人の心について、私たちは観察できないが、しかしそれについて何事かを知っている。オースティンが論文「他人の心ころ」で言うように、この他人の心についての知は、その点で特殊であるが、これもまた、観察しないで知っているという点で共通している。他人の心についての知は、**実践的知識の一種**なのであろう。)

●実践的知識≠行為拘束型発話

この場合の実践的知識「カレーを作っています」は、**真理値を持つ主張型**の発話である。これは「あなたはなにを作りますか」と問われて「カレーを作ります」と答えるときの**行為拘束型発話**とは異なる。「カレーを作っています」という発話は、**観察によらない知**である。

しかし常に真であるのではない。なぜなら、カレーのルールのもりでつくっていたのだが、まちがってハヤシライスのルールをいれて作っていたということもありうるからである。

●実践的知識が間違っていたとき、私たちはどうするのか。